

氏名（本籍）： 藤井聡子（神奈川県）

学位の種類： 博士（文化財）

学位記番号： 博美第105号

学位授与年月日： 平成14年3月25日

学位論文等題目：

〔論文〕『薬師三尊十二神将図』における芸術性の回復（修理および想定模写）

〔作品〕東京芸術大学大学美術館蔵「薬師三尊十二神将像図」の想定模写

論文等審査委員：

総合主査：東京芸術大学 教授（美術学部） 田渕俊夫

論文担当第1副査：東京芸術大学 客員教授（美術学部） 柳澤 孝

作品担当第1副査：東京芸術大学 教授（美術学部） 宮廻正明

副査：東京芸術大学 教授（美術学部） 北田正弘

副査：東京芸術大学 非常勤講師（美術学部） 半田達二

#### （論文内容の要旨）

東京芸術大学大学美術館蔵「薬師三尊十二神将図」は本紙料絹の損傷が著しく、特に長年の香煙や埃などによる汚染や、絵具焼けによって画面全体が黒化しているため、図様の識別が甚だ困難で鑑賞性を極めて損ねていた。そのため、今日までこの画像の存在はほとんど顧みられず、従って研究の対象にならなかった。しかし見方を変えれば、そのような著しい損傷、黒化なども敬虔な供養が長く行われてきた証しであり、保存され続けられていること自体非常に貴重なことであるといえる。

今回、文化財保存学保存修復日本画研究室の実習において、本作品に修理を施すこととなり、実物に触れる好機に恵まれることになった。修理の事前調査で赤外線写真撮影を行なったところ、黒化した画面の下から墨線が明瞭に写し出され図様はさほど損われていないことが判明し、きわめて興味深い図様を持つものであることが観察された。この作品の制作時期については芸大の蔵品目録では室町時代作とされていたが、様々な図様・表現の特徴から鎌倉時代までさかのぼる作品であることが推測された。そこで原本に対する修理にとどまらず、研究の対象として図様の再現、更にはそれを基に想定模写を試みることにした。

本研究では、修理にあたっては、まず画面の損傷や過去の不適切な修理による箇所を改善させ、いかにして損なわれた芸術性を回復するかを課題とし、特に現状維持という方針のもと現状における損傷の進行を防止し、今後の保存に耐えられる健全な状態に修理することを目標とした。また修理の詳細な工程は、原本そのものとともに後世への重要な資料と考え、記録した。

図様再現にあたっては、原本の肉眼観察に加え、赤外線写真・X線透過写真・接写写真などによる調査の結果を踏まえて、基本となる図様・表現形式を把握する。更に現存する類似作品との

密接な比較検討を実施することにより、美術史的根拠に基づいた図様再現が可能になるものと考えた。本作品に使用されている絵具を推定するためには、前記方法に加え、蛍光 X 線分析法を併用し、より正確に絵具を推定する裏付けとした。

図様再現研究によって作成した再現図に彩色・截金を施していった。この彩色と截金に関しては制作当時ではなく、約 700 年を経た今、もし本紙料絹の黒化・損傷等が無ければ存在しているであろう姿を想定して再現することを試みた。彩色においては、鎌倉時代の状態の良い諸遺例を参考とした。

結果、修理を行うことにより不均一な印象が改善され多少明るく、調和のとれた画面を甦らせることができ、修理の成果を充分にあげることができたと確信する。更に将来行われるであろう修理の際により安全に、更により方法で作業を行うための参考となるような記録の作成ができたと考えている。

図様の再現に当たり、各尊像を描き分ける優れた描写力を確認した。また薬師如来坐像の衣の裾を左右だけでなく中央からも垂らす点や、頭光のみを背にする点、足の先を隠すという点、脇侍が本尊の左右後方脇に配されるという点、十二神将像の珍しい沓や鉾の表現など様々な特異な点が見い出され、独自の図様や表現によって描きだされた、美術史的にもきわめて貴重な作品であることが確認された。これらの検討の末、制作時期が鎌倉時代までさかのぼると考えるべきとの結論を得た。

原本の想定模写は、形の上では制作当初の安定感のある図様が回復し、非常に優れた作品であることを再確認させた。また彩色の上では制作当初の宗教の対象となっていた煌やか且つ荘厳さといった本来の意味を偲ばせつつ、現代においても充分鑑賞に耐え得る古色を帯びた芸術性の高い作品を仕上げることができた。この点においても本研究の成果が得られたと確信した。

本研究の修理および想定模写の成果により、同様に損傷が著しく図様識別が困難なために鑑賞性を損ね、正当な評価を得ていない作品が再評価される糸口になればと考える。

修理者としての立場、美術史的・科学的な客観性、且つ画家としての技術的な経験を活かして作品に本来の芸術性を甦らせる想定模写の試みは、かつてなかったことであり、総合芸術の研究の場である東京芸術大学においてでなければ不可能な研究といえよう。更に具現化したものを資料として原本とともに残すことは文化財保存の在り方として非常に有意義なことである。本研究の成果は経年変化により変わってゆく現存仏画の修理および図様再現や模写の研究に大いに寄与できるものと確信する。